

# みんなの 第2のおうち

葛西大きなおうち保育園

---



## 異年齢児の関わりを通して

昨年度は、経験豊富な職員がリーダーになっていた  
ので、自然に異年齢で関わり合える保育のイメージ  
はあったが、保育動線の確立や落ち着ける環境を  
軸に保育を行っていったため、各クラスの保育にな  
っており、縦の繋がりを持つことが難しかった。

そこで、大切にしていきたい思いの一つである「異  
年齢児の関わり」に焦点を当て話し合いを重ねた。  
そこで抽出された2点の意見を検証していくこととし  
た。

①全園児を全職員で見守っていく方法に関わる全ての職員が考え実践していく

②異年齢児との関わりを増やすにはどうすればいいかを考え、それによって子どもの表情や関わりに変化が見られるか



## 成長に寄り添う

- 年長児4名が乳児クラスで過ごす「お世話の日」を毎週水曜日に設けること。
- 振り返りの話し合いで出た「プラスの言葉掛けをする」「気持ちを代弁する」という関わりを全職員が実践すること。

以上の2点から“乳幼児双方の関わりに変化が見られるか”“異年齢児と関わる際に言葉の変化が見られるか”を「行動の変化」として、それらすべての関わりや行動の変化から見られた子ども達の姿を「心の変化」とする。これら二つの変化を評価の基準とすることとした。



## 見えてきた行動の変化

意図的に異年齢児の関わりを増やしていったことで、子どもたちもお互いを身近な存在として意識し関わり合う姿が増えていった。大きな変化としては、年上児が年下児の名前を覚え、積極的に名前を呼ぶ姿が増えたこと、年下児もいつも遊んでくれる年上児を見つけると指差して訴え、駆け寄っていく姿が見られるようになっていったこと等があげられる。

特に年長児は保育士の関わりをよく観察しており、衣服の着脱や靴を履かせてあげる際「できたね」「すごいね」等優しく声を掛け寄り添う姿が見られた。



## 見えてきた心の変化

保育士等が寄り添い気持ちを受け止めていったことで、“どうすればいいか分からない”という気持ちから、“かわいいな”“もっとあそびたいな”という気持ちに変化していった。いまでは、「〇〇ぐみにあそびにいきたい!」と言う姿が増え、園全体で子どもたちがお互いに関わり合う姿が見られるようになっている。また、年下児が出来たことを褒めたり共感したりとする優しさや思いやりが育まれているように感じる。

## 互いに支え合い、育ち合う

日々の言葉がけや行動をその都度振り返り、一人ひとりが意見を出し合ったことで『プラスの言葉掛け』や『代弁すること』等、共通の目標に向かい、保育を实践する事が出来た。副次的な効果として自分のクラスだけでなく、他のクラスの子どもに対する関わりを考える機会となった。子どもたちの成長に寄り添うことは、保育士等が同じ思いで同じ方向を向くことが大切だと再認識した。

今後も実践を続けていき、子どもも大人も互いに支え合い育ち合う保育園を目指していきたい。

